

論文審査報告の結果の要旨

論文提出者氏名 芝崎 厚士（しばさき あつし）

論文題目 日本における近代国際関係認識の原形成
朝永三十郎と〈自我・国家・国際関係〉

提出論文は、「国際関係とは何か」という国際関係研究における根源的な問いと答えを構成する認識論的機制である国際関係認識の近代日本における形成過程を、明治末から昭和前半期に活動した哲學家朝永三十郎の思想と行動を通して検討したものである。提出者は、朝永の議論から、〈自我・国家・国際関係〉という認識論的機制を抽出し、このような国際関係認識の歴史の変遷を跡づけることで、現在及び将来の国際関係ひいては国際関係を含めた全体としての世界のあり方や構成をより精確に理解するための基礎となる見取り図を提示している。それは近代日本の国際関係思想の研究であるとともに、近代国際関係認識そのものが依って立つところの認識論的機制を問題化する意欲的な試みであるといえよう。提出論文の構成及び要旨は、以下の通りである。

「はじめに」において簡単に本論の構成が示された後で、「第1部 国際関係認識研究」では、研究の枠組、研究史の整理、課題の提示がなされる。第1章では、国際関係認識研究の基本的な前提と枠組が、論文提出者のこれまでの国際文化論研究を踏まえて、提示される。第2章では、国際関係認識研究の枠組を作るための第一の作業として、国際関係研究における国際関係認識研究が持つ位置とその射程が論じられる。第3章では、国際関係認識研究の枠組を作るための第二の作業として、真木悠介（見田宗介）の著作、とりわけ『自我の起源』が取り上げられ、国際関係認識研究にとっての意義が論じられる。これらを受けて、第4章では、国際関係認識を「自我と自我間関係」のなかで位置づけるための視座を得るために、カントの議論をもとにした国際関係をめぐる解釈の系譜を検討している。これは、第2部で詳述する朝永三十郎の議論を扱うための前提作業であるが、同時にそれは、朝永に限らず、カントに基づいて国際関係を理解し考えることそれ自体が持つ歴史性一般が、国際関係認識の歴史的考察にとって有効な視座を与えることを示すものである。第5章では、近代日本の思想的系譜において朝永の著書『カントの平和論』が占める位置を概観することで、第2部への導入としている。

「第2部 朝永三十郎研究」は、朝永三十郎の生涯にわたる思想の変遷が検証される。第1章で、朝永の国際関係認識が結実した作品である『カントの平和論』の成立過程を詳細に論じたうえで、第2章では、『カントの平和論』を成立せしめた朝永の内的契機が分析される。このようにまず『カントの平和論』の位置を定めたうえで、次に論文提出者は、

朝永の言論活動の全体像を、誕生から欧米留学以前（第3章）、留学と帰国直後（第4章）、『カントの平和論』前後及び晩年（第5章）の三つの時期に区分しながら、明らかにしている。このことにより、提出論文の分析の焦点となる朝永の『カントの平和論』が持つ論理的構成と時系列的位置づけが明らかにされるとともに、『近世に於ける「我」の自覚史』をはじめとする朝永の他の著作と『カントの平和論』の内的関連が論じられ、朝永三十郎における近代的な国際関係認識がいかなる形で胚胎し結実していったのかが、考察されている。

「第3部 結論 近代国際関係認識の形成」は、第1部の方法論的議論と、第2部の実証的議論を踏まえたうえで、それらが持つ意味をより一般的な形で論じた結論部分にあたる。第1章では、朝永三十郎の歴史の意味を総括し、そこに〈自我・国家・国際関係〉という認識論的機制を読み込むことで、近代日本における国際関係認識の原形的形成を見出している。第2章は、朝永以後の日本におけるカント解釈の系譜学をたどりながら、朝永の『カントの平和論』を中心的対象とした提出論文の射程を再検証しつつ、同時に、近代国際関係認識の変容の前兆に気付いた先駆的事例が取り上げられている。これらを受けて第3章では、近代日本という限定を離れて、一般的な国際関係認識の近代的様相と現代的変容を捉えるための基本的な見通しを提示することで、全体を締めくくっている。

以上が提出論文の要旨であるが、本論文は次のような点で評価することができる。第一に本論文は、およそ近代国際関係認識そのものを成り立たせる前提となる、〈自我・国家・国際関係〉という認識論的機制を対象化した、極めて意欲的な論稿である。従来国際関係思想研究においては、戦争や平和の個別的事例に対する言説が取り上げられるか、あるいは、国際関係論のパラダイムの成立史が扱われることが大半であった。それに対して、本論文は、既往のパラダイムが無意識のうちに前提としている認識枠組それ自体を問題化しようとした試みとして、評価することができる。そこには、国際文化振興会の成立過程に関する実証的研究から出発した論文提出者が、次第に、国際関係思想研究に対象を移していった過程において発見した、国際関係認識における「主体」に対する根源的問いが、背景にある。取り組んだ課題の質とそれを支える問題意識に、本論文の第一の特質があるといつてよい。

第二に本論文は、朝永三十郎の国際関係認識に関する個別研究としても、従来水準を越えるものである。近代日本の哲学史において朝永三十郎は必ず言及される名前ではありながらも、国際関係論の文脈ではほとんど言及されることはなかった。このような研究状況のなかで、提出論文は、朝永の著作、とりわけ『カントの平和論』をその成立過程にまで遡りながら丹念に検証していくことで位置づけを明らかにしただけではなく、従来あまり知られてなかった初期の丁西倫理協会における言説から、晩年の議論にいたるまでの朝永の議論の推移を綿密に扱っており、大正期の政治思想史としても随所に示唆的な指摘が見られる点は評価できる。

第三に、日本外交思想史研究のなかでも、本論文は独自の地位を持ちえるものである。日本外交思想史研究においては、近代日本における西欧主権国家体系の受容と葛藤に関心が向けられた結果、近代国際関係認識の不安定さに焦点が絞られてきた嫌いがあるが、本論文はこれとは逆に、日本における近代国際関係認識の定礎のされかたに焦点をあてた論稿である。これにより、近代日本の議論をより一般的な文脈において再解釈する視座が新たに提示されたことの意義は少なくない。また、朝永三十郎をとりあげることで、国際関係認識を狭義の国際関係論をめぐる言説に限らず、より広い思想的な文脈のなかで捉える視点を提供したことも評価されよう。

しかしながら、提出論文にはいくつかの弱点と思われる個所も存在する。第一に、本論文は、朝永三十郎『カントの平和論』を、日本における近代国際関係認識の原的形成を示す典型的事例として詳述したものであるが、朝永の議論を同時代の日本における他の論者との比較対照を通して検討するという視点は、やや弱いように思われる。例えば、同じく新カント派に属する思想家でもより世界国家論に傾斜していったような事例との比較や、西田哲学のその後の展開過程における〈自我・国家・国際関係〉という認識論的機制の位相などは、少なくとも朝永の議論を同時代的文脈のなかで理解しようとする場合には、論点となり得るのではないか。『近世に於ける「我」の自覚史』と『カントの平和論』を主要著作とする朝永三十郎が、論文提出者の問題意識に符合する事例であったことはよく理解できるが、逆に論理的前提からやや先験的に選ばれた歴史事例であるという印象も残るのではないか。

第二に本論文では、近代国際関係認識の原的形成や、国際関係認識の近代的様相と現代の変容が論じられているが、現代の変容に関して集中的に論じたのは、第3部の最終章のみであり、このため、論文提出者が抱いている国際関係認識の将来像は間接的に示唆される形にとどまっている感は否めない。既に多くの問題提起を行っている本論文の内容を考えると、やや望蜀の感はあるが、「はじめに」で言及されたポストモダニズムに拠る既存の英語圏の国際関係論研究批判や、第3部の終章で扱われるウォルツやワイトの議論については、論文提出者の立場からのより詳細な検討が必要なのではないか。そのことを通して、著者の国際関係認識像はより積極的な形で提示され得るように思われる。

しかしながら、これらの点は本論文の学術的価値をいささかも損なうものではない。総じて、本論文は、従来の国際関係思想研究においては必ずしも自覚的には論じられてはいなかった問題群を主題化しその解決の方向性を示した点で、学界に対して多大な貢献をしたものと認めることができる。以上の点から審査委員会は、本論文の提出者は、博士（学術）の学位を授与されるのにふさわしいと判断する。